

講演会「被爆死したアメリカ兵捕虜」

講師 森 重昭氏（歴史研究家・広島市在住）

日時：2013年6月1日（土）

於：麻布台セミナーハウス

<森さんのプロフィール>

1937年広島生まれ。国民学校3年の時、被爆。被爆者にインタビューを重ねる中で、被爆死した米兵の問題に出会い、2004年にトーマス・カートライト著『爆撃機ロンサムレディー号』（NHK出版）をPOW研究会の福林徹らと共訳出版、2008年には自著『原爆で死んだ米兵秘史』（光人社）を出版した。



■ 森さん自身の被爆体験を語る

私は1937年広島市に生まれ、8月6日原爆投下時は転校していた己斐（こい）国民学校3年生。朝、学校へ向かう途中、爆心地から2.5kmの橋の上で被爆。川に吹き飛ばされて助かる。友人たち2人と並んで歩いていたが友人らは大やけどしたが軽症で済んだ。光線の具合なのだろうか。「ピカドン」という言葉があるが、「ピカ」はあったが「ドン」という音は聞いていない。きのご雲に覆われた空は真っ暗で自分の指も見えないくらいだった。

川をよじ登っていくと胸の裂けた女性が「病院はどこですか。」と聞いてきたが、恐ろしくて逃げた。しばらくすると黒い雨がふり、夜は寒いくらい。広島市は火の海になり、体に巻きつけていた新聞紙が読めるくらいだった。当時は、爆弾は地上の目の前で爆発したとばかり思っていたが、上空だったのだ。体験者しかわからない衝撃的な体験だった。

己斐小学校は避難所となり、被爆死体を校庭に溝を掘って焼いた。その数2300体。この数も、数に開きがあり、多くの証言者に話を聞く中で、実際に焼却作業をした人々を探し当てて正確な数を掴んだ。この調査は被爆死した米兵を調べ始めるきっかけになった。



■ 被爆死した米捕虜 リスト

【陸軍】

★B-24 ロンサムレディー号……9人中6人被爆死

①ダーデン・ルーパー少尉 ②ジェームズ・ライアン少尉 ③ヒュー・アトキンソン軍曹

④ジョン・ロング伍長 ⑤パットフォード・エリソン軍曹 ⑥ラルフ・ニール軍曹

★B-24 タロア号……11人中3人被爆死

⑦ジョセフ・ダビンスキー少尉 ⑧ジュリアス・モルナー軍曹 ⑨チャールズ・バウガートナー軍曹

【海軍】

★SB2C ヘルダイバー……乗員2人全員被爆死

⑩レイモンド・ポーター中尉 ⑪ノーマン・ブリセット三等兵曹

★グラマン F6F 戦闘機……乗員1人被爆死

⑫ジョン・ハンシエル少尉

B-24 ロンサムレディー号搭乗員



B-24 タロア号搭乗員



■ 原爆で被爆死した米兵捕虜の調査のきっかけ

1974年NHKで「原爆の絵」を募集した際、爆心地近くの相生橋で欄干に繋がれた米兵が死んでいる絵が複数あり、投下後に住民からの投石や暴行死で死んだとの話が流布していた。しかし、本当にそうなのか、粘り強く聞き取りを続けた結果、当時、撃ち落とされ捕獲された米兵たちは、原爆ドーム近くの中国憲兵隊司令部に連行され、そこで被爆して死んだのだということが判った。翌7日、応援に来た憲兵隊は、生き残って負傷していた隊員らを宇品に移動させた。その任に当たった憲兵を探し出して聞いたところ、まだ、生きていた米兵（調査の結果、ロンサムレディー号の③アトキンソン軍曹と判明）も移動させようと橋の欄干に縛っておいたが、移動時には絶命している様子だったので、そのままにして出発した。これが、相生橋で投下後暴行を受けて死んだとされていた米兵の話だ。この他に目撃者を捜して聞きまわった結果、橋に繋がれていたが、すでに死んでいたという証言があり、憲兵の話と一致した。このアトキンソン軍曹を橋のそばに埋葬した日本人（川本さん）の遺族からも話を聞いた。橋のそばの米兵捕虜に関しては2名いたという説があり、はっきりしない。

■広島で被爆死した米兵の個々のエピソードと遺族との交流

それから、広島市内には当時、何人の捕虜がいて、どのような最後をとげたか、森さんの調査が始まった。終戦間際には遺族には米軍より、「戦闘中日本上空で行方不明」、続いて翌年46年には「8月6日捕虜として日本に抑留中、戦死した」とだけ知らされている。中にはマッカーサー最高司令官より、お悔み状が届いた遺族もいた。(ロンサムレディー号②ライアン少尉)

米軍・米政府は死亡した兵士の数や被爆が原因であったことを掴んでいながら、遺族には教えず、やっと1983年、初めて米軍は陸軍の8人、海軍の2人が広島原爆の犠牲になったと公式に発表した。数だけで氏名は公表しなかった。

翌1984年ニューヨークタイムズ・マガジンに米ジャーナリストのロバート・マノフ氏が10名の名前や所属を記事にする。

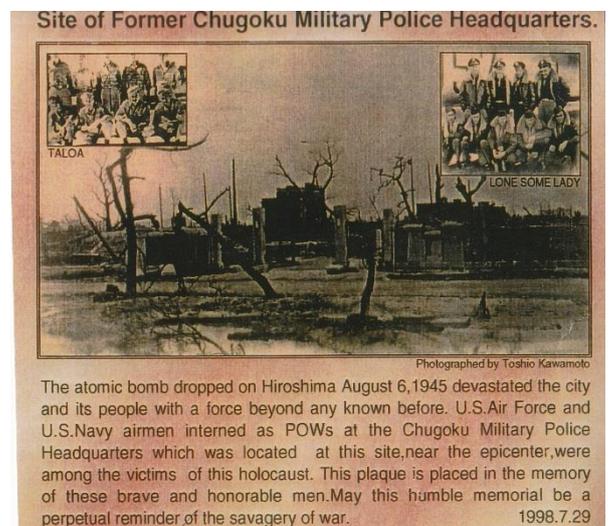
それに先立つ1977年、広島大学原爆放射線医科学研究所の宇吹暁助手(現・広島女学院大学教授)が、外務省外交史料館で、広島で被爆死したとされる米兵捕虜20名の名前を発見し、「第五中国地区軍管区目録」という題で発表した。しかし、このいわゆる「ウズキズ・リスト」の20名のうち、九州で逮捕された9名は九大生体解剖事件で死亡した捕虜であり、憲兵隊は事実を隠ぺいするために、広島原爆で死亡したと虚偽の報告をしていたのである。このリストから彼らを除くと、残り11名が被爆死した捕虜になる。

そこで森さんは、米軍の公表10名とウズキズ・リストの11名のずれを長年調査してきた。最終的には米軍公表の10人に、タロア号の⑦ダビンスキー少尉とグラマンF6Fの⑫ハンシェル少尉を足して、合計12名となった。ダビンスキー少尉は前日の5日に中国憲兵隊司令部で見習士官の取り調べをうけている。ハンシェル少尉は4日間瀬戸内海を漂流した後、広島の中国憲兵隊に連行され被爆死している。

中国憲兵隊司令部跡に設置された慰霊碑

広島平和公園には300余りの慰霊碑がある。しかし、被爆死した米兵捕虜の碑はなかった。森さんは個人の資金で中国憲兵隊司令部跡地一現在はビルが建っているが、そのビルの裏にオーナーの了解を得て慰霊碑の銘板をカートライト機長名で1998年に設置した。これは被爆死した米兵捕虜の唯一の慰霊碑である。

また2002年に新しく国立平和祈念館ができ、被爆死者の遺影と名前が登録されることとなり、森さんは被爆死米兵の遺族から遺影登録の許可を取り付けるため、遺族とのやり取りを始めた。最終的には全ての遺族が協力してくれることになったが、初めて原爆死したのだということを知る遺族もいたのには複雑な思いだった。



実際、2003年に④ロング伍長の関係者に会った折、彼らが持っていたものはGHQの資料と消息を尋ねる新聞記事のみだった。この時、こうした遺族へ最期を知らせる仕事を一生をかけてやろうと自分自身に誓った。彼は広島城近くで被爆死したと「広島原爆戦災誌」に載っていた。この戦災誌は公式な広島市の記録だが、間違いも多々あり、その都度指摘してきた。

⑥ニールは射撃手、⑩ブリセットはヘルダイバーの射撃手だが、この2名は被爆後、広島から宇品に移され、19日、口から緑色の液体をだし、余りの苦痛に乗組員がモルヒネを与えるも、効果なく、打ち殺して欲しいと懇願する。彼らが被爆後、司令部よりさ迷い出て広島城あたりで憲兵に連れて行かれる様子がNHKの絵となっている。彼らが同じ宇品にいた米兵捕虜（浜田憲兵隊から移送）に親への伝言を託したという証言や、看取った宇品憲兵隊員の証言とも重なる。（なお、この二人の死亡診断書は、POW研究会の福林徹が2007年に国立国会図書館に保存されているGHQ資料の中から発見している。発病日時は投下日の8月6日、病名はニールが「頭部及ビ顔面爆傷」、ブリセットは「腹部爆傷及ビ両足蹠火傷」。死亡日19日、死亡場所は船舶練習部附属病院、爆心地から4km離れた病院で軍医の書いたものだ。）

⑨バウムガートナーの遺族に電話するとき、岩国基地の人に電話してもらったのを覚えている。

⑧モルナーの写真を見ると、帽子につばがないので階級は低い。相生橋で目撃された死亡した捕虜の2人のうちの1人とされているが、どうだろう？

⑩ポーターは爆撃機のパイロットだが、その前日の5日に司令部で幹部の息子（中村さん）が捕虜を見学に来た折に姿を見られている。

①ルーパーの場合は、彼の戦死公報が届いた後に妻が再婚し、なかなか遺族と連絡が取れなかった。連絡が取れた時は再婚しており、やがて再婚相手が亡くなってから、遺影の登録を承諾してくれた。彼女の人生にも色々あったのだろうと想像できた。

■豪元捕虜の広島案内とペグリーさんの長崎

2012年秋、豪元捕虜と幟町（のぼりちょう）小学校の交流集会は外務省からの要請もあって、現場の先生方が協力してくれたので実現した。音楽の先生の指導で児童がオーストラリアの第二国歌マーチング・マチルダを歌って歓迎してくれた時、元捕虜や民間抑留者の皆さんも、気持ちがほぐれたようだった。そこで私は被爆体験と捕虜体験の辛さを話した。（POW研究会HP掲載レポート「日本政府招聘によるオーストラリア人元捕虜・抑留者の来日」参照）



幟町小学校での交流会

<http://www.powresearch.jp/jp/activities/report/aus3.html>

この小学校出身の佐々木禎子さんはもともと元気な人だったが、12歳の時に白血病になって死んだ。白血病は目に見えない形で病死していくのが原爆病の恐ろしいところだ。彼女の他にも無名の女子学生が「原爆ドーム」を残して欲しいと書いて亡くなっている。

初期の死亡者は14万人±1万人と言われている。±とは一家全滅でアンケートに答えられない人たちだ。死亡原因をみても原爆との関連がはっきりしない例も多く、認定が難しい。(1990年の厚生省調査では被爆死は広島約20万2千、長崎約9万4千で合計29万6千である。)

2013年春、豪元民間人抑留者(中国に抑留)のベグリーさんが長崎を訪問した時には、戦時中民間人抑留所が設置されていた「聖母の騎士修道院」に案内した。ここには、修道院の設立者で後にアウシュビッツで他人の身代わりになって処刑されたポーランド人のコルベ神父の記念館もある。爆心地から1.7kmの所に捕虜収容所(福岡14分所―三菱重工長崎造船分所)があったがここでは200人が被爆して、オランダ兵捕虜7人、英兵捕虜1人合計8人が被爆死している。被爆捕虜の中には24人のオーストラリア人も含まれ、ベグリーさんは彼らの名前を平和祈念館に登録すべく奔走しているという。(ここで当会の笹本妙子が在外被爆者手帳申請の話をつけ加える。今の所、手帳の交付は蘭の3名にとどまり豪1名が申請中、被爆捕虜の生存者を探して連絡したいとの話だった。)

民間人抑留所は、広島近くでは三次(みよし)町にあった。ここには拿捕されたオランダの病院船「オプテンノール号」の乗組員たちが抑留されていた。

■質問に答えて

Q: 捕虜米兵たちは事前に原爆の事を知っていたか。

A: ロンサムレディー号はカートライト機長以下、知らなかった。タロア号は知っていた。次の都市は攻撃すべからずと教えられていた中に広島・長崎・小倉・新潟が入っていた。(森さんの著書『米兵秘史』によるとバウムガートナーらを取り調べた際、「恐ろしい、近いうちに広島が全滅するような爆弾が投下される。ここにいたら死ぬのだ」と答えている話が広島原爆戦災誌に書いてある。

Q: 日本人は知っていたか。

A: 伝単(ビラ―日本語で書かれた宣伝文は日本人の捕虜が作成)が撒かれ、広島に新型爆弾を落とすとあった。中国憲兵隊司令部の人の中にも宮島へ逃げた人がいて生き残った。

Q: 米軍は兵士が被爆死したことを伝えたか。知った時は国に対してどんな気持ちか。

A: 政府レベルでは陸軍が8人、海軍が2人被爆死したことを認めるが、いまだに個人名は公式にはない。原爆投下前、米軍幹部は長崎に捕虜がいる事を知っていた。遺族は被爆死を初めて知った時は大ショックだが、「国家の犠牲者ではないか」と大きな声で言えない現状。軍との交流が多く、死亡を賛美され、丁寧なお悔み状が届けば表だって文句を言えない雰囲気がある。

(高田 ミネ)